論文

『イブン・ハルドゥーン自伝』写本についての一試論

橋爪　烈
日本学術振興会特別研究員（財団法人東洋文庫）

はじめに

本稿はNIHUプログラム・イスラーム地域研究早稲田大学拠点主催「イブン・ハルドゥーン自伝読書会」において用いられている『イブン・ハルドゥーン自伝』（以下『自伝』）校訂テキスト[1]（校訂者Muḥammad b. Tawīt、本稿では「校訂者」と表記）の基となっている諸写本について、その概要と『自伝』写本についての校訂者自身の見解やその問題点を示し、それに対して筆者の対案を述べることを主たる目的とする。既に佐藤健太郎氏が指摘しているように、校訂テキストはイスタンブル、カイロなど中東諸地域の写本に依拠して校訂出版されたものである[2]。また校訂者の解題に示された諸写本にしても、その存在が指摘されるのみの写本もあり、全写本を用いて校訂がなされているわけではない。さらに『自伝』写本は単独で存在するのではなく、イブン・ハルドゥーンの主たる著作である『省察と実例の書*Kitāb al-ʿibar*』（本稿では『省察』と表記）に含まれる形で現存していることが多く、『自伝』テキストの写本を検討するにあたっては、『省察』にも視野を広げた上で行う必要がある。そこで、可能な限り『自伝』や『省察』写本を収集し、それらを比較検討することが肝要であるが、現時点では筆者の手許に九点の『自伝』写本ないしテキスト[3]が存在するのみであり、『省察』を含めた形での考察には至っていない。従って、本稿で示す見解は暫定的なものであることを指摘しておく。

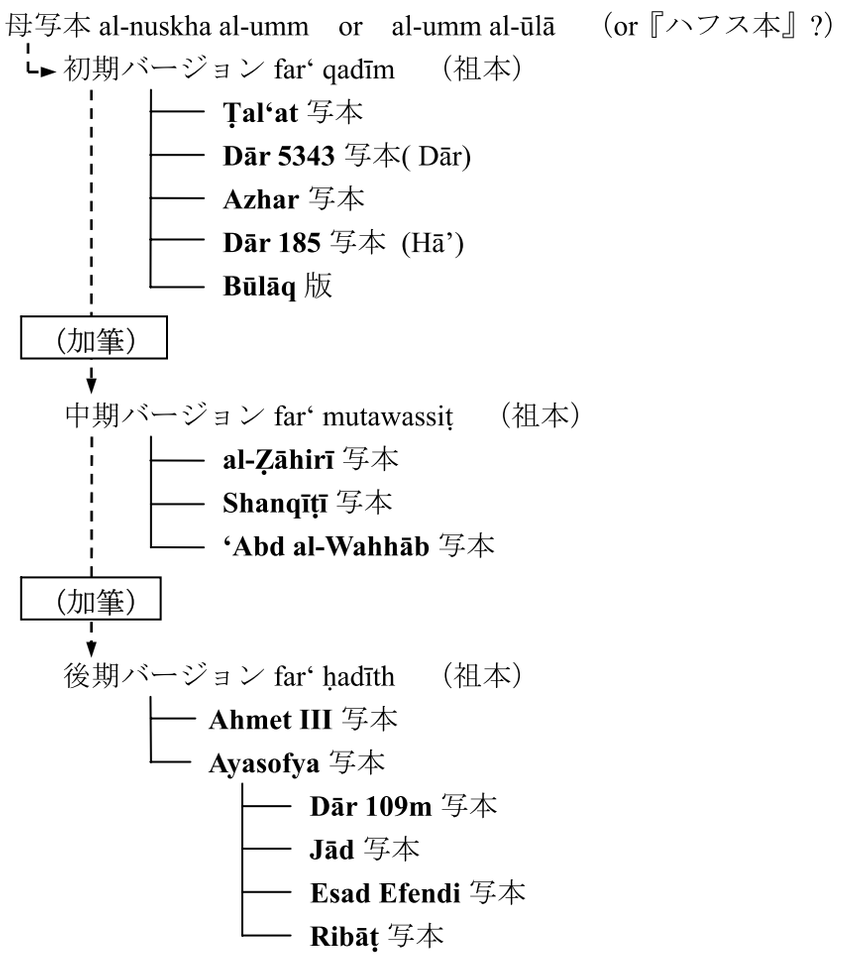
さて本稿は、まず校訂テキストに用いられた『自伝』写本の書誌情報を提示する。次に校訂者の解題の内容を示し、その問題点を指摘する。そして最後に筆者による『自伝』写本についての若干の考察を述べる、という構成をとる。これらの作業を行うことで、一つには今後の訳注作業に有益な情報を提供することになるだろうし、またイブン・ハルドゥーンが行った『自伝』や『省察』の執筆活動、あるいは『歴史序説』や『省察』写本についての検討材料を提供することにもなるだろう。

一　『自伝』テキストに用いられた諸写本の概要

考察に先立って、校訂者が参照ないし情報提示している『自伝』諸写本の書誌情報を示すことにする。まずは校訂に際して底本とした二写本、Ayasofya写本とAhmet III写本について述べると、校訂者は両写本を「著者（イブン・ハルドゥーン）の手書きによるもの*muskhat al-muʾallif*」、すなわち自筆写本であるとし、故に最も信頼に値する写本であるという見解を示している[4]。

アヤソフィヤ写本（Ayasofya）

現在はSüleymaniye図書館Ayasofya分類3200番[5]として所蔵されており、『省察』写本からは独立して存在する写本とのことである。同写本は二部構成で、一部は1～41a、49b～59a、60～63aの各葉、もう一部はそれ以外であるとする。これは筆跡および一葉における行数の違いから、書き手が異なることが分かり、それ故同写本は二人の書き手によるものであることになる。



写本系統図一　校訂者 Muḥammad b. Tāwīt による『自伝』写本系統図

校訂者は第一部の書き手は不明とするが、第二部の書き手についてはその筆跡から、トルコの Yeni Cami に所蔵される『歴史序説』写本（Yeni Cami, no. 888）の写字生アブドゥッラー・イブン・ハサン・イブン・ファッハール 'Abd Allāh b. Ḥasan Ibn al-Fakhkhār であろうと推測する。

第二部は、Ayasofya 写本の欠落部分を後に補ったものと考えることができるが、第一部の写字生を不明とする校訂者の見解には疑問が残る。そもそも彼は同写本を、著者イブン・ハルドゥーンの直筆であるとしているのであるから、第一部の書き手はイブン・ハルドゥーン本人とすべきであろう[6]。なお同写本の完成年代は記載がなく不明であるが、イブン・ハルドゥーンの直筆本ならば、ヒジュラ八〇七年からヒジュラ八〇八年の間ということになるだろう[7]。またこの Ayasofya 写本から幾つかの写しが作成されており、解題では四写本が挙げられている。これについては後述する。

アフメト三世写本（Ahmet III）

Topkapı 宮殿博物館付属図書館所蔵 Ahmet III 分類 3042/4 番[8]であり、『省察』写本の末尾に付されたものである。校訂者は写字生を、Ayasofya 写本の第二部の写字生イブン・ファッハールその人であるとし[9]、また Ahmet III 写本は Ayasofya 写本よりも新しいと言う。校訂テキスト 249 頁 4 行目から 253 頁 6 行目にかけて示される、マムルーク朝スルターンのザーヒル・バルクーク al-Malik al-Ẓāhir Barqūq からハフス

朝のアブー・アッバースAbū al-ʿAbbās al-Ḥafṣīへの手紙の内容がAyasofya写本では記されていないのに対し、Ahmet III写本では示されているというのがその理由である。これを根拠に校訂者は、イブン・ハルドゥーンがまず第一の自筆本（Ayasofya写本）を著し、後にバルクークの手紙を追加挿入した自筆本（Ahmet III写本）を著したと考えているのである。この見解に従うならば、Ahmet III写本がイブン・ハルドゥーンの『自伝』テキストの最終形態ということになり、これこそ底本とすべき写本ということになるだろう[10]。また同写本には、それに由来する子写本が存在せず、孤立した写本であるという指摘もなされている[11]。

以上が、校訂テキストに用いられている二つの底本の概要である。続いて校訂者はAyasofya写本に由来する諸写本の内容を紹介する。

ダール・アルクトゥブ写本（Dār 109m）

Dār al-Kutub所蔵ta'rīkh分類109m番とされる写本[12]。ヒジュラ十二世紀初頭（一六八〇年代以降）に書写されたもので、その表題がAyasofya写本と同じであるが故に、同写本に由来する写本と判断しているようである[13]。ただ校訂者はDār 109m写本の写字生のアラビア語能力を問題視し、校訂には使用していない。

私家蔵書写本（Jād）

校訂者本人の所有する（と思われる）写本[14]で、一三〇七／一八八九―九〇年に写字生ムハンマド・ブン・アブドゥッサラーム・ブン・ジャードMuḥammad b. ʿAbd al-Salām b. Jādによって書写されたものであるという。彼はAyasofya写本から書写したとは述べていないが、校訂者によると両写本を比較した結果、その親子関係が明らかであるという。なお校訂テキストでは［ج（jīm）］と表記されている。

エサト・エフェンディ写本（Esad Efendi）

Süleymaniye図書館Esad Efendi分類2268番とされる写本[15]。書写年代、写字生名ともに不明であり、Ayasofya写本との関係について校訂者は明確な根拠を示していないが、恐らく内容比較の結果、Ayasofya写本と同系統の写本である判断しているものと思われる。校訂テキストでは使用していない。

ラバト写本（Ribāṭ）

Ribāṭ図書館所蔵D1345番とされる写本である[16]。書写年代、写字生名ともに不明であり、Ayasofya写本との関係も明確ではないが、校訂者はその表題がAyasofya写本と同じであり、特に表題の後半にある「彼の東西の旅の記録」という文言がAyasofya写本及びAhmet III写本のみに見えること、Ahmet III写本に由来する子写本の存在は知られていないこと[17]を根拠にAyasofya写本の子写本と見なしている。ただしこの写本も校訂テキストには使用していない。

以上がAyasofya写本に由来すると校訂者が考える諸写本であり、これらは後期バージョン[18]に分類されている。次に彼は中期バージョンに属する諸写本についての紹介に移る。

ザーヒル写本（Ẓāhir）

Topkapı宮殿博物館付属図書館蔵Ahmet III分類2924/13-14番[19]の第十四巻目315葉から381葉に相当する写本である。このAhmet III分類2924は全十四巻からなり、『省察』『歴史序説』『自伝』を含む写本であって、マムルーク朝スルターン、マリク・ザーヒル・バルクークへの献呈本に由来するものであると思われる[20]。同写本は七九七／一三九四―五年にイブン・ハルドゥーンがマッカ巡礼を終えてエジプトに戻ってくるまでの内容を含んでいる[21]。校訂テキストでは［الظاهري（al-ẓāhirī）］と表記し、278頁[22]までの校訂に用いられている。

シンゲッティー写本（Shanqīṭī）

モーリタニア共和国の都市シンゲッティーの図書館所蔵のta'rīkh分類1 sh番写本の一部（363b葉から383a葉）に相当する写本[23]。合冊されたものの一部であろう。一一三七／一七二四―五年アラウィー朝君主の一人イスマーイールal-Malik al-Mawlā Ismāʿīl（在位ヒジュラ一〇七二～一一三九年）[24]の書庫に収められるべく書写された写本で、校訂者はこれを*Ẓāhir*写本の「姉妹写本*ukht nuskhat al-ẓāhirī*」とし

ている。校訂テキストでは［ش（shīn）］で表記している。

アブド・アルワッハーブ写本（'Abd al-Wahhāb）

私家蔵書写本である[25]。校訂者は所有者であったḤasan Ḥusnī 'Abd al-Wahhāb Bāshāから贈られたと記している。先に挙げた中期バージョンの二写本との違いがほとんどないことからこの写本を中期バージョンに分類している。ただし、同写本を校訂に使用していない。

以上が中期バージョンに分類される写本である。次に初期バージョンに分類される写本の紹介がなされる。初期バージョンの収録内容は校訂テキストで278頁まで、すなわち中期バージョンと同じである。

アズハル写本（Azhar）

Azhar大学図書館所蔵ta'rīkh Abāẓa分類6729番とされる写本[26]。一二七〇／一八五三―四年写字生アフマド・イブン・ユースフ・アズハリーAḥmad b. Yūsuf b. Ḥamd b. Turkī al-Shāfi'ī al-Azhariによって書写された写本であり、またこれを基にBūlāq版テキストが出版されたとのことである。『省察』写本の七巻目の後半部に置かれ、Būlāq版でも同じく七巻目の後半部に翻刻されている。このAzhar写本は故シャイフ・ナスル・フーリーニーNaṣr al-Hūrīnīによって注釈が付されているとのことである。校訂テキストではAzhar写本を［ز（zā'）］、Būlāq版を［ب（bā'）］で示している。

タラアト写本（Ṭal'at）

Dār al-Kutub所蔵Ṭal'at分類ta'rīkh 2106番とされる写本である[27]。故アフマド・ベク・タラアトAḥmad Bak Ṭal'at氏の図書館に所蔵されていた写本で、一一八一／一七六七―八年書写、写字生名は不明である。校訂者は、Azhar写本と同写本は写字生が異なる以外の違いはなく、姉妹写本であると判断している。校訂テキストでは［ط（ṭā'）］で示されている。

ダール・アルクトゥブ所蔵二写本（Dār 5343、Dār 185）

Dār al-Kutub所蔵ta'rīkh分類の5343番215b葉から262a葉に相当する写本[28]および185番90a葉から131b葉に相当する写本[29]。Dār 5343写本は一二五四／一八三八―九年書写で、Dār 185写本はヒジュラ十三世紀末ごろ（一八七〇～八〇年代）の書写であり、どちらもAzhar写本やṬal'at写本とよく似ており、初期バージョンであると判断されている[30]。

以上、校訂テキストにその情報が記載されている写本の書誌情報と若干の補足・指摘を述べた。校訂者はこれらの写本を用いて『自伝』写本の系統を作成し、分類を行っている。その系統図が写本系統図一である。これは校訂テキストの解題に示された図に若干手を加えて見やすくしたものである。これをみると、まず「母写本 *al-nuskha al-umm*」が作成され、そこから初期バージョンの写本が作成されたと理解できる。さらにその初期バージョンからいくつかの子写本が作成され、またこの初期バージョンに加筆が行われて中期バージョンが作成されたと理解できる図となっている。ただし、この系統図だけを見ると「初期」から「中期」に至る矢印に「加筆」を示すような説明がないため、中期バージョンが初期バージョンの子写本として存在しているとも取れる図示である。同様に中期バージョンから子写本が派生し、また加筆のうえ後期バージョンが作成されていることが分かるだろう。

二　校訂者による写本解題の概要

写本系統図一の有する問題点は後に指摘するとして、次に校訂者による写本解題の内容を見ることにする。この過程を経ることで、系統図の有する問題点も明らかになってくると思う。

校訂者によると『省察』[31]写本には三種類の祖本が存在する。まず第一祖本は[32]、イブン・ハルドゥーンがエジプトへ出立する以前、すなわち七八四年シャアバーン月十五日／一三八二年十月二四日以前[33]に、チュニスのハフス朝君主アブー・アッバースAḥmad II b. Muḥammad Abū al-'Abbās al-Mustanṣir al-Ḥafṣī[34]（在位ヒジュラ七七二～七九六年）に献呈した祖本（以下『ハフス本』と呼ぶ）がそれである。第二の祖本[35]は、エジプト滞在中、当時のマム

ルーク朝スルターンであったバルクーク（在位ヒジュラ七八四～七九一、七九二～八〇一年）に献呈されたもので、『ザーヒリー本 *Kitāb al-ẓāhirī*』と呼ばれるものである[36]。第三の祖本[37]は、七九九／一三九六―七年にエジプトよりフェズのカラウィーン・モスクへのワクフとして送られたものである（以下『カラウィーン本』）。ヒジュラ七九九年当時フェズを支配していたのはマリーン朝のアブー・ファーリス・アブドゥルアズィーズ Abū Fāris ʻAbd al-ʻAzīz II b. Abū al-ʻAbbās Aḥmad II[38]（在位ヒジュラ七九六～七九九年）であり、イブン・ハルドゥーンは彼の名前で同書を寄贈したようである[39]。

第一祖本：『ハフス本』
第二祖本：『ザーヒリー本』
第三祖本：『カラウィーン本』

以上の三種のうち『ザーヒリー本』は Topkapı 宮殿博物館付属図書館蔵の Ẓāhir 写本との関連が予想できるが、残り二種はその存在が確認できず、これらを比較検討することはできない。現段階では校訂者の見解を受け入れ、以上の三種がその執筆時期によって内容に違いがあることを確認しておく。

次に校訂者は、これまでに作成された『自伝』写本の数を不明としつつ、現存写本が三つの元写本[40]へと帰せられると指摘する。その上で校訂者は、写本系統図一の三分類[41]と先に挙げた三種類の祖本との関係について述べている。まず初期バージョンについては『ハフス本』に由来する写本群を当てる。後期バージョンについては、イブン・ハルドゥーンが死の数ヶ月前まで加筆修正を行っていた稿本（『ハルドゥーン本』）[42]に由来する写本群とするが、『カラウィーン本』がこれに相当するとは言っていない。また中期バージョンについては特に言及していない。写本系統図一[43]を見る限り『ザーヒリー本』が中期バージョンに含まれていることは分かるが、『カラウィーン本』については指摘がなく、中期バージョンとすべきか、あるいは後期バージョンと考えられるのか明らかではない。ヒジュラ七九九年に献呈されたということから考えて、後期バージョンに属す写本ではないだろうが[44]、では中期バージョンに分類できるのか、また『ザーヒリー本』と同じ内容を含むのか不明であり、今後調査する必要がある[45]。ともかく校訂者の見解から、

初期バージョン＝『ハフス本』
中期バージョン＝『ザーヒリー本』および『カラウィーン本』（後者は未確定）
後期バージョン＝『ハルドゥーン本』

となる[46]。

さらに校訂者は「全ての写本は第一母写本 *umm ūlā*[47]である『ハフス本』に基づいており、それから枝分かれしている」[48]とする。しかしその一方で、新しい写本 *al-aṣl al-ḥadīth*[49]は『ハルドゥーン本』のことであり、イブン・ハルドゥーンの最晩年まで加筆修正が行われているので、『自伝』テキストの校訂にあたっては、後期バージョンの諸写本に対する調査を基礎とする必要があると述べる。もちろん初期、中期バージョンも必要に応じて参照するが、文章や単語に異同がある場合、後期バージョンのものが優先されるとする[50]。以上が校訂者の『自伝』写本についての見解である。

さて、以上のような諸写本の書誌情報と校訂者の解題について、その問題点を示しつつ考察を行ってみよう。

三　解題の問題点

校訂者の解題の有する問題点は大きく見て、母写本なるものの存在を仮定していることと、各バージョンの祖本に相当する写本が特定されていないことに集約される。写本系統図一を参照されたい。彼は母写本 *al-nuskha al-umm* から初期バージョンの祖本が作成され、次に中期バージョンの祖本が作成され、そして後期バージョンの祖本が作成され、また各バージョンから数写本が派生していると言う見解を示している。問題は名前が判明している各写本ではなく、母写本と各バージョンの祖本である。

前述のように、校訂者の見解では、全ての写本は第一母写本 *umm ūlā* から派生しており、その母写本は『ハフス本』なのであるが、写本系統図一では『ハフス本』がどれに相当するか示されていない。「母写本 *al-nuskha al-umm*」と「初期バージョンの祖本」のどちらに『ハフス本』を置くべきか示す必要があろうが、なされていない。同様に、中期バージョン、後期バージョン

の祖本に相当する写本を明示してもいない。また彼の見解では初期及び中期バージョンの祖本が献呈本であること、そして後期バージョンの祖本はイブン・ハルドゥーンが死ぬまで手許に置いていた稿本であるとなっているが、特に初期と中期については大いに疑問が残る。「献呈本」というからには清書が行われ、装丁も美しく飾られた写本が予想される。また献呈後、イブン・ハルドゥーンがさらなる加筆修正を行う際に、献呈本自体に加筆修正を行ったとも考えにくい。とすると、少なくとも献呈本と同じ写本が存在するか、もしくは献呈本作成の基となった写本ないし稿本の存在が推測される。

この様に見て行くと、校訂者には、稿本と清書版（ないし完成稿）という概念が抜けていると推測することができる。以下ではこの推測と解題の問題点を念頭に、校訂者の見解とは異なる『自伝』写本の作成過程を示すことにする。

四　『自伝』写本についての考察

上記のように、校訂者には『自伝』写本に、稿本と清書版の二種の版が存在するという考えがなかったことを指摘した。そこで以下では、その二種の版を想定して考察を進める。これによって『自伝』写本の（引いては『省察』写本の）作成過程がより理解しやすくなると思われる。そこでまずは写本系統図二を参照されたい。これは校訂者による解題や参照しえた写本の書誌情報などから筆者が想定した『自伝』写本の作成過程と系統図である。まず指摘すべきは、イブン・ハルドゥーンが死ぬまで手許においていた稿本を、全ての写本の原本としている点である。すなわち、イブン・ハルドゥーンは、『ハフス本』も『ザーヒリー本』も『カラウィーン本』もこの手許の稿本『ハルドゥーン本』から清書した上で献呈していたと考えたのである。一旦献呈した写本から写しを作成し、それを手許に残したと考えるよりも無理がない。それに校訂者も述べているが、常に加筆修正がなされていたわけであるから、稿本には多くの書き込みや削除の指示が示されていることが予想される。そしてそのような書き込みの入った本を献呈するとは思われない。従って、常に稿本を手許に置き、献呈の際に清書したと考える方が妥当と思われる。

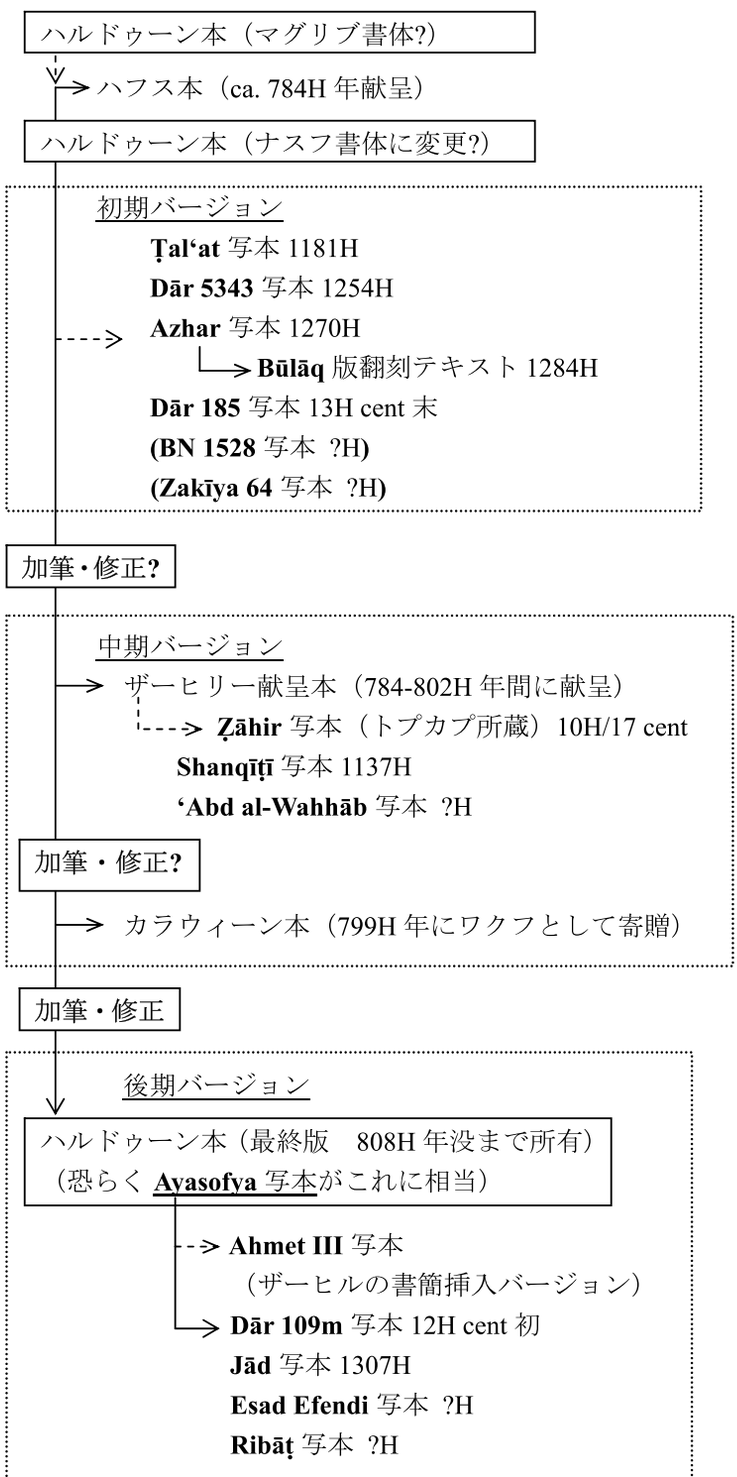
この考えが正しければ、写本系統図二のようになるだろう。『ハルドゥーン本』から『ハフス本』、『ザーヒリー本』、『カラウィーン本』がそれぞれ作成されている。各献呈本の間には加筆等が行われたことを示すために「加筆修正」の文言を付しており、これによって前後の献呈本の内容に違いがあることを示した。つまり、校訂者の系統図で示されていた初期、中期、後期の各バージョンの祖本には、どれも『ハルドゥーン本』が相当し、ただし、その内容は加筆修正によって異なっている、ということになる[51]。

以上の見解は、以下で行う諸写本の比較検討作業から導き出したものである。筆者の手許には校訂テキストの他に九点の『自伝』写本およびテキストのコピーがある。Ayasofya、Ahmet III、Dār 109mを除く六点の写本およびテキストが、校訂者のいう初期バージョンに分類される写本であり、六点の収録内容もほぼ合致するため、この分類は妥当であろう。そこでAyasofya写本を底本[52]として、他の初期バージョンの諸写本との比較を試みた。Ayasofya写本には欄外に多くの書き込みがあり、また本文中にも多くの削除指示が示されている。これらの書き込みや削除指示は、他の写本と比較するにあたって、諸写本間の関係を推測するに大いに役立つ。またAyasofya写本はイブン・ハルドゥーンの自筆本であるともいわれているが、その見解が正しければ、Ayasofya写本こそ『ハルドゥーン本』ということになる。この欄外の書き込みをみると、本文中の筆跡と非常に似ており、少なくとも本文と欄外書き込みの書き手が同じである可能性は高いといえる[53]。

そこで九点の内、後期バージョンに分類されるAyasofya写本と初期バージョンに分類されるṬal'at写本およびBN 1528写本を選び、この三写本を校合する作業を行った。対象とした葉はAyasofya写本がff. 1b-22a; 62a-63aであり、Ṭal'at写本がff. 160b-174a; 195b-196a、そしてBN 1528写本がff. 3b-15b; 34b-36aである。この作業は、Ayasofya写本の該当葉に欄外書き込みが多数あること、同写本がイブン・ハルドゥーンの自筆写本とされており、本文と欄外書

き込みの筆跡が似ていることから、Ayasofya写本が彼の稿本である可能性が見込まれること、校合の範囲が最初の方の数葉であるため、初期バージョンのṬal‘at写本とBN 1528写本にその欄外書き込みがどのように反映されているか検討できるのではないか、という見通しに基づいて行った。

その結果、Ṭal‘at写本およびBN 1528写本はAyasofya写本の欄外書き込みをほぼ全て本文中に反映し、また削除指示についても反映し、Ayasofya写本に存在する文章が本文中から削除されていることが判明した。



写本系統図二　（筆者による暫定系統図）

後期バージョンであるAyasofya写本の欄外書き込みなどが初期バージョンであるṬal'at写本およびBN 1528写本の本文中に反映されているということは、Ayasofya写本が両写本の祖本すなわち「ハルドゥーン本」である可能性が極めて高いことが言えるだろう。イブン・ハルドゥーンは自らの稿本に書き込みをし、その書き込み入りの稿本からṬal'at写本やBN 1528写本が、ないしその親写本が作成されたのである。このAyasofya写本の欄外書き込みが初期バージョンの祖本作成後に行われていた場合、Ṭal'at写本やBN 1528写本にAyasofya写本の欄外書き込みが反映される可能性は極めて低い。またṬal'at写本やBN 1528写本がAyasofya写本を、イブン・ハルドゥーンの死後に写したのであれば、初期バージョンの有する記述範囲、すなわちAyasofya写本の63a葉目で書写を終えることなく、最後まで書写したであろう。

以上の検討から、現段階で利用できる『自伝』写本の情報を総合すると、当初の予想通りAyasofya写本はイブン・ハルドゥーンが死ぬまで手許に置いていた稿本、『ハルドゥーン本』であるという可能性が非常に高いと言えるだろう。また各バージョンの区別は『ハルドゥーン本』へのイブン・ハルドゥーン自身の加筆・修正の時期に由来するということも言えるだろう。そしてここから写本系統図二の如き系統図が作成できるのである。

おわりに

本稿では、『自伝』校訂テキストの解題に示された写本の書誌情報や初・中・後期のバージョン分けなどに対して、その問題点を指摘し、筆者なりの対案を示す作業を行った。再三述べてきたが、参照しえた写本のコピーに偏りがあり、また十分な比較検討作業を経ていないので、暫定的な見解ではあるが、『自伝』写本の作成過程や系統に関する校訂者の考えは修正されるべきものであることは示せたと思う。特にAyasofya写本と初期バージョンの写本との比較検討からは、イブン・ハルドゥーンが常に手許に草稿を置き、それに加筆・修正を加えており、他の写本はその草稿から清書されたもの、ないしその清書版に由来する写本である可能性が高いこと、そしてAyasofya写本こそが、イブン・ハルドゥーンが死ぬまで手許に置いていた草稿である可能性が高いこと、この二点を導き出すことができた。この点は校訂者の見解と異なる部分であり、本稿の成果と言えるだろう。また本稿では、校訂者の見解に沿って三つのバージョンの存在を前提に考察を進めたが、そもそも三つのバージョンに区分すること自体から問い直す必要があることも浮上してきた。ただしその作業は校訂者が「中期バージョン」とするẒāhir写本などのコピーを入手し、他の写本との比較検討が必要であるため、今後の課題としたい。

本稿は平成二十一年度科学研究費補助金（特別研究員）による研究成果の一部である。

【注】

(1)『自伝』校訂テキスト（以下、校訂テキストと表記）およびIbn Khaldūnの著作の書誌情報については『イスラーム地域研究ジャーナル』Vol.1, 2009, p. 48を見よ。

(2) 佐藤健太郎（二〇〇九）「イブン・ハルドゥーン自伝について」『イスラーム地域研究ジャーナル』Vol.1, p. 47.

(3) 手許の『自伝』写本は以下のとおり。Ayasofya、Ahmet III、Dār 109m、Azhar、Ṭal'at、Dār 5343、BN 1528、Zakīya 64、Būlāq版（Būlāq版以外は写本である。また各写本の詳細は次節のリストを参照のこと）。この内、Būlāq版はAzhar写本からの翻刻であるため、またAhmet III、Dār 109m、Dār Zakīya 64は入手間もなく、詳細な校合作業を行うことができなかったため、参照程度にとどめている。加えて中期バージョン（後掲註18を参照のこと）の写本は入手していない。

(4) 校訂テキストc頁。

(5) MS in Süleymaniye, Ayasofya 3200, 83 ff., 25.9 x 18.5 cm, 25 ll., 29 ll., Naskh. なお校訂者は第二部の行数を28行としているが、正しくは29行である。

(6) 写本の表題頁にも同写本がイブン・ハルドゥーン直筆のものである旨が記載されている。この書き込みを信ずるならば、第一部の書き手はイブン・ハルドゥーンということになろう。しかし、この書き込みがイブン・ハルドゥーン自身のものであることを裏付ける証拠はない。従って、Ayasofya写本がイブン・ハルドゥーンの直筆であるかどうかは別の面から確かめる必要がある。これについては本稿第四節の考察を参照のこと。

(7) イブン・ハルドゥーンの死亡年は八〇八／一四〇五年であり、Ayasofya写本の最終行にヒジュラ八〇七年ズー・アル＝カアダ月の文言が見えるた

め、この写本の擱筆はその日付以降となる。

(8) MS in Topkapı Saray, Ahmet III 3042/4, 51 ff., 32 x 51.5 cm, 35 ll. 葉の横寸51.5 cmとあるが、おそらく印刷ミスであろう。Karatay の目録には3042/4なる写本は示されていない。一方、アラブ連盟写本研究所（写本研）所蔵のマイクロフィルム・カタログには3042/4写本の書誌情報が示されている。ただし、『自伝』写本が末尾に付されているかどうかについての記載はない。恐らく校訂者は写本研のマイクロフィルムを利用したのであろう。F. E. Karatay (1966), *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Arapça Yazmalar Kataloğu*, İstanbul, III, pp. 381-384 ; Fu'ād Sayyid (1954-59), *Fihris al-Makhṭūṭāt al-Muṣawwara*, Juz' 2, ta'rīkh al-qism al-awwal, al-Qāhira, p. 179.

(9) Ayasofya 写本と同様、著者の直筆であり校訂の底本とされた写本であるが、校訂者はいきなりその見解を翻しているのであろうか。しかし彼の書き方では、イブン・ファッハールの書写とも断言できない。『省察』についてはイブン・ファッハールが書写し、『自伝』に関してはイブン・ハルドゥーン直筆のものであるということだろうか。このあたり校訂者の見解には混乱が見られる。

(10) やはり書写年代（ここでは執筆年代というべきか）についての情報はないが、自筆本であるならば、ヒジュラ八〇八年と考えるのが妥当だろう。

(11) 校訂テキストｚ頁。

(12) MS in Dār al-Kutub al-Miṣrīya, ta'rīkh 109m, 49 pp., 23 x 17 cm, 31 ll., Ta'līq (Fārsī). 校訂テキスト解題には49頁とあるが、149の間違いである。なお葉数にすると75葉となる。

(13) これ以外の理由は示されていないが、実際にDār 109m写本をみると、収録内容がAyasofya写本と同じであり、同系統写本であることが分かる。また校訂者は同写本の写字生のアラビア語能力を疑問視しているが、その理由も示されておらず、不使用の理由は不明である。

(14) MS in Personal Library, 128 ff., 25 x 17.5 cm, 19 ll., Naskh, copied in 1307H.

(15) MS in Süleymaniye, Esad Efendi 2268, 93 ff., 32.7 x 15.5 cm, Naskh.

(16) MS in al-Ribāṭ, D 1345.

(17) Ribāṭ写本とAyasofya写本、Ahmet III写本を比較した結果、Ayasofya写本に由来すると結論付けるならともかく、彼の示す根拠ではRibāṭ写本とAhmet III写本との関係を否定することはできない。

(18) この「バージョン」とは、『自伝』写本の作成時期と収録内容の違いに基づく校訂者の分類であり、初期*fur' qadīm*、中期*fur' mutawassiṭ*、後期*fur' ḥadīth*と三分類されている。写本系統図一および後掲註22, 40, 46なども参照のこと。

(19) MS in Topkapı Saray, Ahmet III 2924/13-14, 435 ff., 27 x 18.5 cm, 21 ll., copied in 10H/17 cent. Karatay が示す書写年代を信ずるならば、イブン・ハルドゥーンの自筆本ではない。Karatay, III, p. 382.

(20) Karatay, III, pp. 381-384. ただし『歴史序説』及び『省察』の第一～二巻に相当する写本は所蔵されていないかあるいは別の分類番号になっていると思われる。第三～四巻（Ahmet 2924/3-4）の書誌情報において［*al-Ẓāhirī fī al- ibar bi-akhbār wa al-'ajam wa al-barbar*］という表題であることが示されており、それ故ザーヒル・バルクークへの献呈本からの写しであることが推測される。

(21) 解題に付されているẒāhir写本の最終葉の写真からヒジュラ七九七年までで終わっていることが確認できる。これは以下で述べる初期バージョンの写本の末尾と全く同じである。

(22) 初期バージョン、中期バージョンともに校訂テキストの278頁までの内容を収録している。従って、写本の末尾を見る限りでは初期と中期の区別はつかない。校訂者は校訂テキスト155－209頁に収録しているIbn al-Khaṭīb の書簡が中期バージョンでは収録されていないことをもって、後期バージョンとの違いを挙げているが、同様に初期バージョンもIbn al-Khaṭīb の書簡を収録していないため、やはり初期と中期の区別はつかない。中期バージョンの写本が手許にない現段階では調査を行うことができないため、とりあえずは校訂者の見解に従って、初期と中期の区別があるとしておくが、今後調査を要する問題である。

(23) MS in Chinguetti, ta'rīkh 1 sh, 20 ff., 31.4 x 21.4 cm, 42 ll., Maghribī.

(24) Bosworth によると、在位はヒジュラ一〇八二～一一三九年とのことである。Bosworth (1994), *The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, p. 53.

(25) MS in Personal Library, 127 ff., 22.2 x 16.7 cm, 26 ll., copied in 1304H.

(26) MS in Azhar, ta'rīkh Abāẓa 6729, 24 ff.

(27) MS in Dār al-Kutub al-Miṣrīya, Ṭal'at, ta'rīkh 2106, 36 ff., 31 ll., Maghribī.

(28) MS in Dār al-Kutub al-Miṣrīya, ta'rīkh 5343, 47 ff., 32.7 x 23 cm, 27 ll., Naskh, copied in 1254H.

(29) MS in Dār al-Kutub al-Miṣrīya, ta'rīkh 185, 41 ff., 33.2 x 22.8 cm, 29 ll., copied in 13H cent.

(30) この他、校訂テキストには示されていないが、筆者が新たに参照しえた『自伝』写本の書誌情報を挙げると、Ms in Bibliothèque Nationale (BN), Arabe 1528, 33 ff., 32 x 21 cm, 33 ll., Maghribī およびMs in Dār al-Kutub al-Miṣrīya, Zakīya 64, 379-463 pp., 30 x 21.5 cm, 31 ll., Maghribī の二写本である。BN 1528は『省察』写本第三巻の冒頭部分に付され、Zakīya 64は『省察』写本第七巻末尾に付されており、『省察』写本の一部として存在する。その収録内容から両写本とも初期バージョンに分類されると思われるが、中期バージョン写本との比較を経ないことには断定できない。cf. W. M. de Slane (1883-95), *Catalogue des manuscrits arabes de la Bibliothèque Nationale*, Imprimerie Nationale, Paris, p. 289b.

(31) 献呈されたイブン・ハルドゥーンの著作は『自伝』や『歴史序説』を含めた『省察』であると思われる。

(32) 解題では *al-nuskha al-ūlā min kitāb-hi li-abī al-*

'Abbās al-Hafṣī malik Tūnis とある。この記述だと「彼（イブン・ハルドゥーン）の本からアブー・アッバースのために（作られた）写し」となる。ここから校訂者が『ハフス本』の基になった稿本ないし完成稿（写本系統図一にある *al-nuskha al-umm* に相当すると思われる）が存在すると想定していることが分かる。

(33) 校訂テキスト245頁。

(34) Bosworth, p. 45.

(35) *nuskha ukhrā* とある。

(36) ヒジュラ七九七年の文言が末葉に見えるため、バルクークの二期目のスルターン在位期間（ヒジュラ七九二～八〇一年）の可能性があるが、正確な献呈時期は不明である。この時期イブン・ハルドゥーンはバルクークの不興を被っており、公職から遠ざけられていたようである。森本公誠（一九八〇）『イブン＝ハルドゥーン』講談社148－152頁。

(37) *nuskha thālitha* とある。

(38) Bosworth, p. 41.

(39) 校訂テキストじ頁。*wa li-dhālika qaddama al-kitāba bismi-hi.* 具体的な過程については不明である。一旦アブー・ファーリスの許に送られた上で、カラウィーン・モスクに収められたということであろうか。

(40) 原語では「三母写本 *ummuhāt thalātha*」とでも訳せる文言を使用しているが、先に示した「母写本 *al-nuskha al-umm*」と区別するため、ここでは「母」の字の使用を避けた。この辺りの説明に関して校訂者の用語法に混乱が見られるため、非常に理解しづらいが、要するに現存する『自伝』写本は三分類され、作成時期によって前・中・後のバージョンに分けられるということである。

(41) 写本系統図一を見よ。

(42) 校訂者はここで、先に示した三つの祖本とは別の稿本を提示する。彼はこの稿本について、具体的に「草稿」とか「完成稿」とは言っていない。死の数ヶ月前まで加筆修正していたという見解から、イブン・ハルドゥーンが死ぬまで手許に置いていた稿本であると考えられるので、本稿ではこれを『ハルドゥーン本』と呼ぶ。校訂テキストて頁。*wa al-aṣlu al-ḥadīthu min hādhi-hi al-uṣūli huwa alladhī baqiya bayna yaday ibni khaldūna ḥatā al-ayyāmi al-akhīrati min ḥayāti-hi.*

(43) 校訂テキストと頁。

(44) 後期バージョンは、イブン・ハルドゥーンが死の直前まで加筆修正していたものに由来するという校訂者の見解からは、『カラウィーン本』は後期バージョンに属さないという結論に達する。

(45) なお写本研に、この『カラウィーン本』に相当すると思われる二写本（『省察』の三巻と五巻に相当する）のマイクロフィルムが所蔵されているが、『自伝』部分は含まれていない。'Iṣām Muḥammad al-Shanṭī (2001), *Fihris al-Makhṭūṭāt al-Muṣawwara*, juz' 2, ta'rīkh al-qism al-sādis, al-Qāhira, pp. 155-157.

(46) このバージョン分類はあくまでも校訂者の見解である。先に指摘したように初期と中期のバージョンがどちらもバルクークの二期目のスルターン在位期の内容（ヒジュラ七九七年までの内容）を収録しているため、この分類自体有効なものではない可能性もある。

(47) 写本系統図一にある *al-nuskha al-umm* を指していると思われるが、前述のように、校訂者は『ハフス本』の基になった稿本の存在を指摘しており（前掲註32を参照せよ）、その見解は一定していない。

(48) 校訂テキストじ-て頁。

(49) 後期バージョンの元写本のことを示していると思われる。このあたり用語が不統一なので理解に苦しむ。

(50) 校訂テキストて頁。しかし、実際に校訂テキストにあたってみると、その方針は守られていない。しばしば底本以外の単語の読みが、典拠を明示することなく採用され、また自伝写本以外のテキストに記載されている読みを採用している場合もあるため、信頼に足る校訂作業とは言えない。

(51) この様にすべての時期にわたって、一種類の『ハルドゥーン本』から献呈本やその他の写本が作成されてたという見解についても問題点は存在する。それは書体の問題である。イブン・ハルドゥーンはマグリブ出身であるので、在マグリブ期の献呈本である『ハフス本』はおそらくマグリブ書体で筆記したと思われる。一方、後述するように筆者はAyasofya写本を『ハルドゥーン本』と考えるが、Ayasofya写本はナスフ体で筆記されている。従って、『ハフス本』とそれ以降でイブン・ハルドゥーンが書体を変えたか、あるいはAyasofya写本はイブン・ハルドゥーンの直筆本ではないということも考えられる。

(52) Ayasofya写本が他の後期バージョン写本の基になっているという校訂者の見解も踏まえ、同写本を底本としている。本稿第一節の後期バージョンの写本リストを参照のこと。

(53) 筆者は筆跡鑑定の能力があるわけではないので、あくまでも同一人物による可能性を指摘するのみである。また明らかに異なる筆跡の書き込みもあるため、その点は注意して検討している。

付記：本稿で参照した『自伝』写本のコピーは、イブン・ハルドゥーン自伝読書会の参加者である原山隆広氏（東洋文庫）および吉村武典氏（早稲田大学）の調査・収集によってもたらされたものである。併せて謝意を表す。